

# 通州事件の語られ方

小林 元裕

## はじめに

日本は華北分離工作によって 1935 年、河北省東部を国民政府の支配下から独立させ、12 月に冀東防共自治政府を成立させた。この対日協力政権の配下にあった保安隊約 5000 が、日中戦争勃発後間もない 1937 年 7 月 29 日に北京郊外の通州で叛乱を起こし、日本軍と戦闘中の第 29 軍に呼応して日本守備隊、特務機関などを襲撃、軍人や冀東政府関係者だけでなく一般居留民を殺害した。その被害は日本人 117 人、朝鮮人 106 人の計 223 人に達した。これを通州事件という。

この事件については従来主に 2 つの点に重点を置いて論じられてきた。一つは通州事件を起こした保安隊の動機、そしてその首謀者と第 29 軍との関係についてであり<sup>1</sup>、もう一つは日本居留民に対する残虐行為についてである<sup>2</sup>。特に後者は、その後に日本軍が起こした南京事件との対比から、南京事件における日本軍の残虐行為の原点が、実は通州事件にあったと日本の保守層によって強調されている<sup>3</sup>。

私はこの事件を別の視点、すなわち通州という場所と殺害された居留民に着目して考えたい<sup>4</sup>。通州は華北においてどのような場所だったのか。日本人だけでなく、なぜこれほど多くの朝鮮人が殺されなければならなかったのか。そしてこれら殺害された日本人、朝鮮人は一体どのような人々だったのか等である<sup>5</sup>。

2011 年 11 月 12 日、新潟大学で開催された国際シンポジウムにおいて私は「華北社会の変容と通州事件」と題する報告を行ったが、通州事件と日本居留民の関係の全体像を提示するには程遠く、主に事件に関する言説をまとめただけで終わってしまった。その後、史料収集、分析に努めたが、依然として一文を完成させるに至っていない。したがってここでは、きわめて不十分な研究ノートのかたちで発表することをお許し願いたい。後日、まとめたかたちで通州事件論をまとめたいと考えている。

以下、テーマに沿って先ず史料を掲げ、次いで簡単なコメントを付して今回は私の責めを塞ぐこととしたい。

## 通州事件の「記憶」－事件直後に通州事件はどう報じられ、どう語られたか

通州事件は事件直後、日本国内においてどのように取り上げられ、どう語られたのか。新聞、雑誌、講演、演劇、等に表れた通州事件像を以下にみる。

## 1. 新聞報道にみる通州事件

- ・ 1937/7/30 『東京日日新聞号外』

「通州で邦人避難民三百名殆ど虐殺さる／半島邦人二百名も気遣はる」

(北平本社特電、30日発) 通州に兵変起るや逸早く通州を脱出して北平滞在中の冀東政府外交委員王潤貞氏に急を齎した張仁蠡氏は卅日午後四時今井武官を訪れ通州兵変事変を報告した張氏の話によれば冀東政府保安処長張慶余が潜入した廿九軍敗残兵の煽動に乗ぜられ俄に叛乱を起し政府を襲ったもので政府要人は一時難をのがれたが大部分が殺害され、宮脇経済顧問、特務機関細木中佐も生死不明である、なほ日本居留民は約三百名で大部分は通州の日本旅館近水楼に避難したが、これまた襲撃され大部分は虐殺されたものらしくその他半島同朋二百名の安否も気遣はれてゐる(下線部は小林による。以下同じ)

(北平本社特電、30日発) 通州における叛乱保安総隊は今回の北支事変につき支那一流の逆宣伝及び敗残兵の煽動に乗ぜられ支那側の大胜を過信し冀東政府長官殷汝耕氏を捕縛、人質として北平に向ひ朝陽門に入らんとして阻止され西直門に向ふ途中わが鈴木部隊に殲滅的打撃をうけたため殷長官は敗残兵に門頭溝方面に拉致された形跡がありその生死は憂慮されてゐるが救出の見込みあるやうである。

- ・ 1937/7/31 『東京日日新聞号外』

「通州の事態 憂慮消えず」

(北平 30日発同盟) 通州城は廿九日の保安隊一部の叛乱によりわが居留民に相当の死傷者を出した模様であるがまだ確報はない、また同地にありし各社の従軍記者も廿九日来殆ど消息を絶ちその安否が気遣はれてゐる。

「殷汝耕長官は無事」

(北平本社特電、30日発) 午後九時北平武官室発表＝昨廿九日以来行方不明となり生死の程を憂慮せられてゐた冀東政府長官殷汝耕氏は某所に健在である。

(北平本社特電、30日発) 冀東政府長官殷汝耕氏は叛乱保安隊のため拉致され安定門外にあつたが、日本側に救出され卅日午後八時半無事北平に入城〇〇に入った。

「冀東政権保安隊／六百名武装解除」

(北平本社特電、30日発) 卅日午後七時から約二時間にわたり安定門外においてわが北平憲兵〇〇名は冀東政府の保安隊約六百名を武装解除し装弾のまま小銃六百、軽機十二、重機三を押収した。

- ・ 1937/7/31 『東京日日新聞号外』

「惨たる通州叛乱の真相／鬼畜も及ばぬ残虐／眼前で村尾大尉殺害／虎口を脱した夫人語る」

(北平本社特電、31日発) 通州叛乱保安総隊顧問村尾昌彦大尉の夫人が頭に縋帯をして顔その他に傷を受け卅日深夜命からがら冀東政府長官秘書孫錯氏夫人(日本人)とともに北平公民巷に逃げ込んだ、身震ひが止まず叛乱部隊の残虐ぶりをポツリポツリと語った。

保安隊が叛乱したので在留日本人は特務機関や近水楼などに集まって避難しているうち廿九日の午後二時頃守備隊と交戦していた大部隊が幾つかに分れてワーツと近水楼や特務機関の前に殺到して来て十分置きに機関銃と小銃を射ち込みました。近水楼の前は日本人の死体が山のやうに軀子が<sup>ママ</sup>つってゐます、子供を抱へた母が二人とも死んでゐるなど二た眼と見られない惨状でした、私達はこの時家にゐました、廿九日午前二時頃保安隊長の従卒が迎へに来たので洋服に着かえようとしたところその従卒がいきなり主人に向かつてピストルを一発射ち主人は胸を押へ「やられた！」と一声叫ぶなりその場に倒れました。

私は台所の方に出て行って隠れていると、従卒がそこらにあるものを片っ端から万年筆までとって表へ行きました、そのうちに外出してゐたうちのボーイが帰って来て外は危ないといふので押入の上段の蒲団のなかにもぐつてゐたところさきの従卒が十人ばかりの保安隊員を連れて家探しをして押入のなかを捜したが上段にゐた私には気づかず九死に一生を得ました、家のなかには主人の軍隊時代と冀東政府の勲章が四つ残つてゐました、それを主人の唯一の思ひ出の品として私の支那鞆の底に入れ主人の死体には新聞をかけて心から冥福を祈りボーイに連れられて殷汝耕長官の秘書孫一珊夫人の所へ飛び込み卅日朝まで隠れてゐましたが、日本人は塵殺しにしてやるといふ声が聞えいよいよ危険が迫つたので孫夫人と二人で支那人になり済まし双橋まで歩きやとそこから驃馬に乗つたが日本人か朝鮮人らしいと感づかれて驃馬曳きなどに叩かれましたが絶対に支那人だといひ張つてやと卅日午後朝陽門まで辿りつきましたが、門がしまつてゐたので永定門に廻りやと入り卅日夜十一時日本警察署に入ることが出来ました、冀東銀行の顧問三島恒彦氏が近水楼で殺され冀東政府の島田宣伝主任等も虐殺されたらしく近水楼にゐた日本人は殆どころされてゐるでせう、昔シベリアの尼港惨劇も丁度このやうな恐ろしさであつたらうと思ひます。叛乱した張隊長は毎日家に遊びに来て「好朋友(ハオボンユウ)、好朋友」などといひ非常に主人と仲良しだったのでこんなことになるとは支那人ほど信じ難い恐ろしい人間はないでせう、主人の遺骸は必ず私の手で取りに行きます。

なほ危険地区を突破し夫の唯一の形見を肌身離さず持ち帰つた沈着なこの婦人の行動は避難邦人の賞讃と感激を受けて同夫人に対する同情は翕然と集まつてゐる。

・1937/7/31『報知新聞号外』

「我將兵廿名戦死／細木〇〇機関長等斃れ／居留民安否気遣はる／冀東保安隊兵変重大化」

北平卅日発同盟＝通州城は昨二十九日の保安隊一部の叛乱により我居留民に相当の死傷者を出した模様であるが未だ確報はない、また同地にありし各社の従軍記者も昨日来ほと

んど消息を絶ちその安否が気遣はれてゐる。

天津特電（卅日発）＝（三十日午後九時半駐屯軍司令部発表）通州方面の敵に対しては廿九日夕刻我飛行機出動し爆撃を加へたり、該敵はその後攻撃を中止して通州北方の教導学校附近に終結し居れり、本日我飛行機は再び該敵を爆撃せり、我増援隊は今夕通州に達せるものの如し、本戦闘における我軍の死傷者左の如し

△死者 将校二、兵十八 △負傷者 将校一、下士官一、なほ敵の死傷莫大にして枚挙にいとまなし。卅日深更確實なる筋へ達した情報によれば通州における冀東保安隊の兵変に際し細木繁〇〇機関長（高知県出身）は奮戦名誉の戦死を遂げ冀東政府経済顧問宮脇賢之助氏（兵庫県出身）は殺害され、その他居留邦人に被害多き模様であるが通信連絡杜絶のため詳細不明で同地在留邦人三百名、半島同胞二百名の安否は極度に気づかはれてゐる。

殷汝耕冀東長官は健在（北平武官室発表）

北平特電（卅日発）＝（午後九時北平武官室発表）昨二十九日以来行方不明にて生死の程を憂慮せられてゐた冀東政府長官殷汝耕氏は某所に健在なり。

・ 1937/8/1 『東京日日新聞号外』

「殷汝耕氏“通州叛乱”を語る／廿九軍戦勝を誤信する／叛乱隊の無謀を説得／監禁四十時間 死線彷徨」

（北平本社特電、31日発）→殷汝耕本人でなく「この劇的秘話は殷氏と最も親近の間柄にある某氏の口から本社支部に齎された」「殷氏が疲労困憊の身横たへながらベッドの上から某氏に直接語った後述記事である」。

「陸相通州事件報告」

杉山陸相が一日の予算総会で報告した通州事件の内容は左の通りである。

通州居留民中六十名は守備隊中に保護收容してゐるが、元來通州には百余名在留してゐたのであるから残余のものが如何なる状態にあるやは未だ判明しない。通州にあった細木中佐以下部下全部の戦死傷より考へても相当損害を受けてゐるのではないかといふことが予想される。廿九日夜川邊部隊が通州に達したのであるが城外に多数の敗残兵がゐたため卅一日に至って漸く入城を得たのである。しかし通信機関は有線無線ともに破損し、また飛行機による連絡も昨日（卅一日）までは敗残兵がゐて容易でなく、未だに内部の状況を詳かにすることが出来ないのは甚だ遺憾である。速やかに詳細なる状況を得るやう努力してゐる。

「憂ひの殷汝耕夫人／本社特派員と語る」

（天津にて三原特派員、1日発）〔省略〕

- ・ 1937/8/1『読売新聞号外』

「通州在留民保護」

(天津 1 日発同盟至急電) 情報によれば通州在留民凡そ三百八十名中確実なるものは八十五名何れも目下我が守備隊内に保護されてゐる。

「叛乱は計画的」

(天津 1 日発同盟) 廿九日の通州保安隊反乱は計画的に敢行されたもので事前に不穏な形勢があったので殷汝耕長官は親兵の手薄を感じ薊県から増援の保安隊を呼びよせたがこれ又グルになって廿九日未明天津に事件が起つたのと相前後して総勢四千名(一説に六千名位と伝へらる)が冀東政府特務機関野戦倉庫、近水楼四ヶ所を目標に叛乱行動に出たものであった。守備隊は辛うじて安全であったが、その他は兵力と防備が手薄であったためにこの参事となったものである。

以上の他に通州事件に関する号外報道の見出しだけを掲げると、次の通りである。

- ・ 1937/7/30『読売新聞号外(東京)』「通州に敵逆襲/天津は小康状態へ」
- ・ 1937/7/31『読売新聞号外(仙台)』「通州の邦人虐殺判明/守備隊殆ど戦死傷」
- ・ 1937/8/2『東京朝日新聞号外(東京)』「掠奪!銃殺!通州兵変の戦慄/麻縄で邦人数珠繋ぎ/百鬼血に狂ふ銃殺傷」
- ・ 1937/8/5『東京日日新聞号外(東京)』「死の街通州を見る/人生の悲劇をこゝに/ああ鬼畜残虐の跡」
- ・ 1937/8/8『東京朝日新聞号外(東京)』「痛恨断腸の血 軋られた通州」
- ・ 1937/8/8『東京日日新聞号外(東京)』「惨!痛恨の通州暴虐の跡」

通常の新聞においても次のように通州事件は報道された。

- ・ 1937/8/3『東京朝日新聞(夕刊)』  
「ああ何といふ暴虐酸鼻、我が光輝ある大和民族史上いまだ曾てこれほどの侮辱を与へられたことがあるだらうか。悪虐支那兵の獣の如き暴虐は到底最後迄聴くに堪へぬ……恨みの七月二十九日を忘れるな」
- ・ 1937/8/4『大阪朝日新聞』「陸相の草稿慄へ、議員悲憤に燃ゆ 婦人傍聴席に洩れる嗚咽 沈痛な貴院議場」(8月3日、貴族院本会議における杉山元陸相の報告に関する記事)

以上から、次の点が指摘できる。

- ①通州事件の首謀者である張慶余の名前が、張仁蠡の話として事件直後に指摘されていた。
- ②朝鮮人被害者の存在は当初から隠さずに報道されていた。
- ③「残酷な中国人」「略奪する中国人」「信じられない中国人」のイメージが村尾昌彦大尉

夫人の証言として掲載され、通州事件と「尼港事件」の対比も同夫人の口から発せられたことになっている。この村尾大尉夫人の証言が後に敷衍される通州事件イメージの原型を提示している。

## 2. 雑誌記事に見る通州事件

### 山川均の通州事件論

・山川均「支那軍の鬼畜性」（『改造』1937年9月特大号、『中国』第49号に再録。『改造』9月特大号は「日支事変と現下の日本」を特集し、山川の文章はこの特集に続く「北支事変の感想」の1本として収録されている。なおこの号は発売禁止処分を受けた）

「通州事件の惨状は、往年の尼港事件以上だといわれている。つぎつぎに発表された遭難者の報告は、読む者をして思わず目を蔽わしめるものがある。新聞は「鬼畜に均しい」という言葉を用いているが、鬼畜以上という方が当たっている。同じ鬼畜でも、いま時の文化的な鬼畜なら、これほどまでの残忍性は現さないだろうから。

こういう鬼畜に均しい、残虐行為こそが、支那側の新聞では、支那軍の……（三字分伏字）して報道され、国民感情の昂揚に役立っているのである。

北支事変の勃発そのものがそうであるように、通州事件もまた、ひとえに国民政府が抗日教育を普及し、抗日意識を植えつけ、抗日感情を煽った結果であるといわれている。

文化人を一皮剥けば鬼畜が出る。文化人は文化した鬼畜にすぎない。支那の抗日読本にも、日本人の鼻に針金を通<sup>ス</sup>うせと書いてあるわけではない。しかし人間の一皮下にかくれている鬼畜を排外主義と国民感情で扇動すると、鼻の孔に針金を通おさせることになる。

通州事件の残虐性と鬼畜性に戦慄する人々には、むやみに国民感情を排外主義の方向に扇動し刺戟することの危険の前に戦慄せざるを得ないだろう。支那国民政府のそういう危険な政策が、通州事件の直接の原因であり、同時に北支事変の究極の原因だと認められているのだから<sup>6</sup>。

この山川の文章をどう読むか、山川の本意どこにあったかについては意見が分かれるところである。しかし中国人作家・巴金はこれを中国に対する批判と受け止め、これに反論する文章を執筆した。

### 巴金の通州事件論

巴金（飯倉照平訳）「山川均先生に」（初出は不明、文末に「1937年9月19日〔上海にて〕書き終える」とある。『控訴』（まえがきに「1937年11月、上海にて」とある）に収録され、後に『巴金選集』1951年、『巴金文集』第10巻、1961年に再録。日本語訳は前掲『中国』第49号に掲載）

「あなたを憤慨させ、あなたに呪いにひとしいような悪罵を放たさせたのは、いわゆる『通州事件』ですが、わたしは、あなたの国の論客があなたがたの『皇軍』の暴行を取りつくろったりするには、それを取りつくろったり、抹殺したりするつもりはありません。わたしたちはそのくわしいいきさつをもっと知りたいと思いますが、すべてのニュースはあなたがたの『皇軍』によって封鎖されてしまいました。わたしたちは、ただ〔あなたの国の新聞記事から〕冀東保安隊が蜂起した時に、通州にいた日本人居留民二、三百人が被害を受けたということを知っているだけです」<sup>7</sup>。

「通州事変の起こりも、このようなところから、一つの解釈をくだすことができます。『皇軍』の威圧とあなたの国の官民の辱しめのもとで二年近い屈辱の日々をすごした保安隊が、反抗の旗じるしをかかげ、もはやこれ以上とてものがまんしきれないというところまで来て、ついに悲憤の炎を燃えあがらせたのです。人数も少なく、ろくな武器もない軍人たちが、置かれた状況の劣悪さを顧みるいとまもなく、血と肉とをもってみずからの自由と生存とをかち取るために立ち上がったのです。混戦のさなかには、一人一人の生命が傷つき失われることはすべて一瞬の出来事です。細かいことにまで気を遣ってはいられなくなって、復讐の思いがかれらの心を捉えてしまったのでしょう。血がかれらの眼をふさいでしまうこともありうることです。抑圧されていた民衆が立ち上がって征服者に抵抗する時には、少数の罪もない者たちが巻き添えをくって災難に遇うということも、また避けがたいことです。まして、このたびの死者は、ふだんからその土地で権柄づくにふるまっていた人たちでしたし、しかもその大半は、ヘロインを売ったり、モルヒネを打ったり、特務工作をしたりしていた人たちなのです。ある外国通信社の電報によると、通州事件の起こった前の日には、四百人の保安隊の兵士たちが、不穩の建議をもってあなたの国の『皇軍』によって銃殺された、ということも、わたしたちは聞き知っています。そうなれば、それに対する報復の行為であったと解釈することもできないことはありません」<sup>8</sup>。

「通州事件を生み出した直接の原因は、それこそ、あなたの国の軍閥の暴行なのであって、抗日運動もまた、あなたの国の政府が長年のあいだつづけて来た中国の土地に対する侵略行為によってうながされたものなのです。あなたがたの『皇軍』こそが、みずから抗日教育を普及し、抗日意識を植えつけ、抗日感情を扇動したのです。あなたがたこそが、飛行機を使い、大砲を使い、火を使い、刀を使って、中国の民衆を教育し、かれらに『抗日』が生存を求めるとのまず第一の手順であることをはっきりさせたのであって、決して中国人が生まれながらにして抗日の感情を持っているわけではありません」<sup>9</sup>。

### 3. 事件の目撃者、同盟通信社特派員安藤利夫の通州事件

安藤には以下の3点の回想が存在する。

- ・『虐殺の巷通州を脱出して』（日本外交協会、1937年10月、謄写版）

- ・『通州兵変の真相：安藤同盟特派員流血脱出手記 附・北支事変従軍記者陣中日記』  
（森田書房、1937年→ マイクロフィッシュ）
- ・「通州の日本人大虐殺」（『文芸春秋』1955年8月号、このとき安藤は産経新聞論説委員）

「前日あたりにさう云ふ気配はなかつたかと云ふことをよく聞かれるのでありますが、吾々は、誠にお恥しい話でありますけれども、事件が始まつてからも、まさか保安隊の兵変であらうなどとは気が付かなかつたほど、全く突然寝返りを打たれたのでありまして、特務機関の御方なんかも、まさかそんな事はなからうと云ふやうな話を前の日にされて居りました」<sup>10</sup>。

安藤は近水楼での日本人殺害（5、6人）を目撃しただけで、大量虐殺を実際には目撃していない。『虐殺の巷通州を脱出して』は、通州城を脱出して北京に辿り着くまでが中心に報告されている。同書で安藤は虐殺をことさらに強調していない。

#### 4. 戯曲に描かれた通州事件—真山青果「嗚呼通州城」

1937年9月に真山青果原作、河合武雄・井上正夫ら主演による「嗚呼通州城」が明治座で上演された<sup>11</sup>。この戯曲は『講談倶楽部』1937年10月号に掲載され<sup>12</sup>、後に『真山青果全集』第12巻（大日本雄弁会講談社、1941年）に収録された。しかし、戦後に再刊された『真山青果全集』には収録されていない。

- ・話の舞台は1937年7月29日午後から夜、通州城内の日本旅館銀明楼。銀明楼は近水楼をモデルにしている。

- ・主役は銀明楼の女主人磯尾おたみ（「この人はもと北支特務機関に勤めたる何某氏の寡婦にて、年齢三十四五、北支生活も二十年近く、今は支那人及び日本人の両方より信頼せられて、日本特務機関との連絡もあり、女ながらも、通州城内に於ては最も必要とせらるゝ人の一人」154頁。）

- ・おたみの台詞

—「日本人は、いま現に、あの鉄砲を射ちながらも、その弾が支那人に当たらないやうにと願つてゐるのだよ。ね、決して支那人を殺すために射つてゐるのぢやないのだよ。日本軍は、あの鉄砲の音に、固く中立を守つてゐる冀東の人民を、信じようとしてゐるのだ。支那をせめる、支那を苦しめるなど、思ひ違ひしてはいけないよ」（168,169頁）。

—（おきよの「おかみさん、荷物も荷物ですけど、それよりは早く、お客さまを逃がすとか何んとか、防禦の工夫をしないでは…」という台詞に対して）「えゝお前、わからないね。二十九軍はいま、中央軍から睨まれてゐるんだ。日本軍に背いたら、自分の立つ

瀬のないぐらみは知つてゐる。騒いぢやいけない。決して保安隊は、日本に背く筈はない。(攻略)。(おきよ)「(前略)その筈のないところに動くのが支那人です。油断しては、とり返しのつかないことになりませう」。(おたみ)「(前略)いつもわたしが云ふことだが、おまへさんは、さう支那人を疑ぐるからいけない。わたし達は、支那人のふところに入つて、同じ心になつてあの人たちを見なければいけない。支那人と云つたつて、別の人種があるのぢやないよ。やツぱり同じ人間なんだよ」(177頁)。(おきよ)「え、おかみさんのやうに、さう支那人を信じすぎては……」。(おたみ)「え、わたしは信じます。今までも二十何年間、わたしは正直に支那を信じて来たのだ。本当に支那人に裏切られる、その瞬間までは、わたしは支那人を信じます」(178頁)。

—第2幕、第1幕から2時間ほど後、保安隊が反乱を起こし銀明楼を襲撃、(おたみ)「国旗だ、国旗だ！日章旗を上げておくれ！（と、グタグタと其処に坐る）」(前略)矢張り支那人は、わたしまでを売った！信じられる国民ぢやない。もう斯うなれば……徹底的に懲らしめるよりほかはない。日本軍の威力を見て、初めて自分の非を悟る国民だ！」(199頁)、「わたしを射つたのは、わたしの信じた支那人だよ。支那人を教へるには、まづ懲らしめるより外はないと、日本軍の人たちに、さう伝えておくれ」(200頁)。

中国人を信じて疑わなかつた銀明楼の女主人おたみが最後には中国人に裏切られる。

中国人の父親と日本人の母親を持つ鄭が国家に翻弄され、最後には日本人に目覚め、おたみを助けて日章旗を挙げる場面でこの劇は終わる。

この戯曲は、安藤利夫記者が描いた近水楼の前日の光景とはまったく異なっている。

戯曲中の「信用できない中国人」像は上述した村尾昌彦大尉夫人の証言と重なる。

## おわりに

「残虐」、「暴虐」な通州事件のイメージは事件直後の新聞報道、特に1937年7月31日付『東京日日新聞』号外に掲載された村尾昌彦大尉夫人の証言が発端となった可能性が極めて高い。この通州事件像が雑誌記事、戯曲等に広く採用され、戦後においても通州事件の残虐性を論ずる際の根拠となった。

### 信夫清三郎の通州事件論

「通州は、日本帝国主義の頹廢現象が集中してあらわれた一点であつた。中国民衆の抗日意識が通州という一点において燃え上がったのは、自然の結果であり、宋哲元の指示が抗日運動を通州において激化させたのは、必然の結果であつた」<sup>13</sup>。

「朝鮮人のアヘン密貿易者が多数いたことは、通州がアヘンをもってする中国「毒化政策」の重要な拠点であることを示していた。通州事件は、第一には、日本が育成した冀東

防共自治政府の日本軍が育成した保安隊が冀東防共自治政府が所在する通州で日本軍にたいして反乱した抗日事件であり、第二は、日本の中国「毒化政策」に恐怖し憤慨した通州の市民が保安隊反乱の混乱に乗じて日本の居留民—および朝鮮人に—に報復した抗日事件であった」<sup>14</sup>。

信夫の指摘する「通州の市民が保安隊反乱の混乱に乗じて日本の居留民—および朝鮮人に—に報復した抗日事件」との評価は正確でない。学生が参加していたことは確認できるが「通州の市民」一般が報復行動をとったとする事実は確認できない。この点は改めて詳細に論じたい。

冀東は、冀東政権成立後、大規模な密貿易が展開され、満洲、朝鮮方面から多くの「一攫千金を夢みる投機的分子か又は浮浪無頼の輩」が流れ込んだ<sup>15</sup>。通州事件の被害者名簿によれば、日本人被害者の多くが冀東政府の職員、特務機関員だったのに対し、朝鮮人被害者は「無職」者が目立った<sup>16</sup>。彼らの多くは「不正業」特に阿片・麻薬密売者が多かったと考えられる。

上述したように中国の文学者・巴金は、事件での被害者が「ふだんからその土地で権柄づくにふるまっていた人たちでしたし、しかもその大半は、ヘロインを売ったり、モルヒネを打ったり、特務工作をしたりしていた人たち」と指摘している。この点は香月清司・支那駐屯軍司令官の回想によっても裏づけられる。

ここで重要なのは、日本の植民地となり、その祖国から離れ、満洲、通州へと流れて来た朝鮮人移民が、日本帝国主義の「手先」として中国で認識され、「被害」に遭った点である。彼らは日本帝国主義が生み出した犠牲者であるが、その一方で中国人にとって阿片・麻薬の害毒をまき散らす「加害者」として存在した。通州事件はその矛盾が具体的かつ先鋭的に表れた事件であった。

(了)

#### 〈参考文献〉

1. 通州事件についての先行研究（注で触れた文献以外）
  - ・高崎隆治『戦場の女流作家たち』（論創社、1995年）
  - ・秦郁彦『盧溝橋事件の研究』（東京大学出版会、1996年）
  - ・山中恒「通州事件の謎」『神奈川大学討論』28号、1997年
  - ・江口圭一「盧溝橋事件と通州事件の評価をめぐって（小特集 十五年戦争をめぐる争点）」（『戦争責任研究』第25号、1999年秋季）
  - ・北博昭「特別記事 日中戦争の未公開写真—写真資料が語る通州事件」（『歴史読本』1999年9月号、新人物往来社）

## 2. 通州事件についての回想録ほか

- ・橘善守「通州惨劇と其の前後」『話 臨時増刊』（1938年7月）
- ・宮田天堂『冀東政権大秘録 通州事変一周年を迎へて』（1938年、復刻版2006年）
- ・無戮会『通州事件の回顧』（1971年）
- ・小堀昭三「通州哀歌」（『妖乱の歌姫 昭和残酷物語・炎の時代』光風社書店、1977年）
- ・荒牧純介『痛々しい通州虐殺事変』（〔荒牧純介〕、1981年）
- ・「通州事变的経過」（南開大学歴史系・唐山市档案館編『冀東日偽政権』档案出版社、1992年、初出は『通県党史文史資料』第6期、1985年）
- ・武月星・劉友于・林華・林治波共著（山辺悠喜子訳）「通州事件」『盧溝橋事変風雲編』（『中帰連』9号、1999年6月）
- ・羽島知之編『「号外」昭和史 1936～1945』第1巻（大空社、1997年）
- ・小林よしのり『新ゴーマニズム宣言 SPECIAL 戦争論』（幻冬社、1998年）

## 注

- <sup>1</sup> 岡野篤夫「惨・通州事件 2人の立役者」（『自由』1989年8月号）、同「通州事件の真相」（『正論』1990年6月号）。
- <sup>2</sup> 宮崎正弘「日本人が虐殺された中国・通州、通化の事件現場の今」（『正論』2004年11月号）、田中秀雄「酸鼻極めた通州事件」（『撃論ムック 教科書が教えない日本被害史 拉致と侵略の真実』オークラ出版、2008年3月）。
- <sup>3</sup> 作家児嶋襄は次のように、日本軍によるその後の残虐行為の原点を通州事件に求める記述をしている。

——そのころ、第二連隊は通州に到着していたが、惨状に誰もが絶息する想いであった。  
特務機関でもどこでも、日本人が住んでいた場所は、例外なく血とハダカの死体にぶつかり、東門に近い池には一カ所に六十人、他の場所に二十九人と虐殺された死体が集団でうかび、「槍斃場」では、射殺され斬殺された約七十人の死体を、まっ黒にカラスの群れがおおっていた。  
おりから盛夏である。死体の腐乱も急速である。  
街は屍臭で満たされ、一步ごとに屍肉をついばむカラスがとびたち、腐肉をあさる野犬がこそこそと物かげにかくれた。  
在留邦人三百八十六人のうち幼児十二人をふくむ二百二十三人が殺され、そのうち三十四人は性別不明なまでに惨殺されていた。  
生き残った者は、かろうじて協会に逃げこみ、あるいは例外的な中国人の好意でかくまわれ、中国服を着用して変装できた人々であった。  
事件をつたえる新聞の報道は、  
「恨みは深し！」  
「世紀の残虐、あゝ呪ひの通州」  
など、一致して強烈的な文字をえらんだが、実情に照合してその表現に誇張はなかった。  
日本国民と参戦将兵の胸奥にはどす黒い怒りがよどみ、やがて「日中戦争」の経緯の中でそのハケ口をもとめていくことになる……」（児嶋襄『日中戦争』下巻〔文藝春秋、1984年〕79、80頁。下線部は小林による）。

- 4 このような視点を持つ研究に次の2論文がある。  
 信夫清三郎「通州事件」（『政治経済史学』第297号、1991年1月号、後に加筆、再構成されて同『聖断の歴史学』勁草書房、1992年に収録）、広中一成「通州事件の住民問題—日本居留民保護と中国人救済—」（『日中戦争再論（『軍事史学』第43巻第3・4合併号）』錦正社、2008年）。後述するように信夫論文では結論に飛躍が見られ、また広中論文では朝鮮人居留民に対する分析が欠落している。
- 5 『中国』1967年12月号（中国の会編集、徳間書店）は「特集・日本の社会主義者と中国」を組み、編集部「作家巴金の抗議」のなかで通州事件について触れている。そこでは支那駐屯軍司令官香月清司中将の「支那事変回想録摘記」が記している事件の犠牲者数及びその内訳である「邦人百四名（内冀東政府の職員及其の関係者約八十名）、鮮人百八名（大多数は阿片密売者及醜業婦にして在住未登録なりしもの）」を引いて、「冀東政府が、日本の華北侵略の、とりわけ経済上からも道徳上からも破壊的な作用を中国に与えつつあった麻薬（アヘン）密輸の拠点であった事実」を指摘した（30頁）。さらに、事件直後、通州を訪れた山本実彦の「さる浪人や、記者などが天津にうらぶれた姿でどこからともなくヒョッコリやってくるが、一たび通州に訪れてからは——さあ、芸者を招べ、自動車を招べ——に変わってくることを私はしたしく宿の女からもきいたのであった」（『支那事変・北支之巻』）という一文を引いて「日本人にとって通州がなんであったかを、まざまざと伝えている」と論じている。朝鮮人居留民については「『十五年戦争』を通じて日本政府が朝鮮や台湾の出身者をどう処遇したかは、必ずしも明らかにされていないが、さきの通州事件犠牲者中のその実数と職業構成を見るにつけても、かつての『一億』のなかに占めていた、これらの人たちの重みを思わずにはいられない」と表現は曖昧だが、その重要性をつとに明示していた（31頁）。
- 6 前掲『中国』第49号、53頁。
- 7 同前44、45頁。
- 8 同前45、46頁。
- 9 同前54頁。
- 10 安藤利夫『虐殺の巷通州を脱出して』2頁。
- 11 野村喬「真山青果年譜」（『真山青果全集』別巻1〔真山青果研究〕、講談社、1978年、589頁）。
- 12 野村喬「真山青果著作年表」（同前、608頁）。
- 13 前掲「通州事件」6頁。
- 14 同前、9～10頁。
- 15 「昭和十年在天津総領事館北平分署警察事務状況（同警察署長報告摘録）」（『外務省警察史』第30巻〔支那ノ部（北支）〕不二出版、1999年）186頁。
- 16 東亜局『昭和十二年度執務報告』第2冊（第二課及第三課関係、1937年12月1日）（『外務省執務報告 東亜局』第4巻〔昭和十二年(2)〕、クレス出版、1993年）586～609頁。  
 同報告は通州事件及び事件被害者数を「本事変に因り邦人の被りたる損害は生命身体財産に亘り暴虐を極め財産に付ては同日夕刻に至る迄「トラック」を以て邦人家宅各戸を掠奪し一物余さざる有様にして（中略）  
 而して不幸此の災厄に遭遇せる死者は内地人117名、鮮人106名、計223名（別表死亡者名簿参照）の多数に上りたるか幸に兇手を免れたる者は内地人98名、鮮105名、計203名なり」と記し（同前583頁）、死亡者名簿を掲載している。死亡者の主な職業は次のとおりである。
- ・「内地人」は主に冀東政府職員、同顧問、特務機関員、同雇員、満鉄社員、冀東銀行員、電話局員、土木業、飲食店業、旅館業、その家族、旅行者（北京からの避難者か？）
  - ・「朝鮮人」は無職、歯科医、洗濯業、製菓業、外務省警察官、教員、餅商、金貸業、女給、酌婦、その家族、旅行者（同前586～609頁）。